



福岡銀行

金属加工と樹脂加工の精密技術で  
半導体製造装置分野を中心に  
幅広く貢献するものづくり集団。

ありあけぎけん  
有明技研株式会社

代表取締役社長

おおまがりかずひこ  
大曲和彦氏

取締役副社長

おおまがりたかひこ  
大曲孝彦氏

取引店／福岡銀行柳川支店

#### ■会社概要

創業:1947年／設立:1990年／所在地:福岡県柳川市／資本金:1,000万円／従業員:180名／事業内容:精密切削加工、精密板金加工、製缶加工、樹脂精密切削・曲げ・溶接加工／事業所:本社工場(福岡県柳川市)、熊本工場(熊本県菊池郡大津町)、大牟田工場(福岡県大牟田市)

会社ホームページは  
こちらからどうぞ!





本社工場前(左から大曲孝彦副社長、大曲和彦社長、五島頭取)

## 父の始めた鉄工所を 29歳で受け継ぐ

当社の原点は、私(和彦社長)の父、大曲近司おほまがしが始めた鉄工所です。戦時中に海軍の工場で溶接工として軍艦の修理などに携わった経験をもとに、戦後まもなく鉄工所を興して農機具などの修理・製造を手がけていたようです。そこから炭鉱関係の仕事なども受注するようになり、1973年に私も父の仕事を手伝い始めました。

当時は小さな町工場で従業員も数名程度。1984年、私が29歳の時に父が亡くなり、それを機に「自分の思うようにやっこいこう」と決意しました。当時の従業員は定年を迎えても会社を支えてくださっていた人ばかりでしたから、父がいなくなつたタイミングで全員が会社を去つた結果、独力での再出発でした。

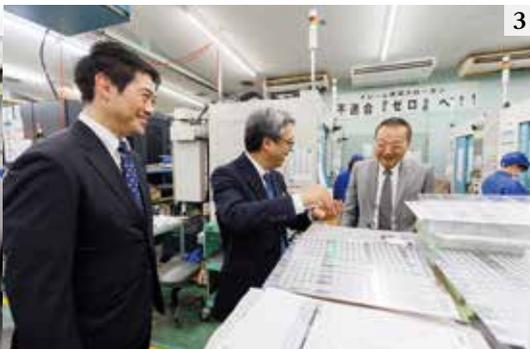
まだ父が亡くなる前に、久留米の鉄工所を視察した私は高価なマシンングセンタ(多様な金属加工ができる工作機械)の必要性を感じ、父に導入を訴えていましたので、年商2,000万円の時代に4,000万もする機械が父の置き土産となりました。そのマシンングセンタ導入のおかげで舞い込む注文が増し、精密加工分野に大きく舵を切ることになりました。

## 将来性を見越して 半導体製造装置分野へ参入

1986年には、半導体製造装置分野の国内最大手である「東京エレクトロン株式会社」のグループ企業、「東京エレクトロン九州株式会社」との取引が始まり、これも当社にとっては大きな節目となりました。

当時、樹脂加工のできる会社を東京エレクトロン九州が探していた関係でうちに話が来たわけですが、それまでの取引先より短納期であることに最初は驚かされました。しかし、半導体業界に将来性を感じていたので、何としても受けねば、という思いがあり、取引開始に踏み切りました。その結果、私は工場で加工作業に追われて毎日息つく暇もなく、先方への納品を妻に託すほどでした。

当社は、現在では機械加工、板金、製缶、樹脂加工を手がけて、材質、加工方法ともに幅広く対応しているのが特色です。また、24時間体制で短納期にも対応できる操業体制を構築しています。こうした強みは、さまざまなニーズに柔軟に対応しながら実績を積んでいった当時の経験が土台となつてでき上がったものです。





大曲孝彦副社長



大曲和彦社長

## 業績を伸ばしていた矢先の 半導体不況で倒産の危機

1990年に現社名に組織変更し、本社旧工場を新工場に移転しました。1990年代には、本社工場および熊本工場を次々に設けて、精密板金加工を開始、板金加工の拡大、金型などの強化といった具合に、各部門を充実させていきました。

現在では、本社工場は金属加工部門、熊本工場は板金加工部門・機械加工部門・製缶加工部門、さらに2017年に設けた大牟田工場は樹脂専用加工部門・組立部門とし、各担当業務を分けて事業の効率化と作業精度の向上を図っています。

会社設立後は順調に業績を伸ばし組織を拡大していた当社でしたが、1998年に起きた半導体不況によって売上が激しく落ち込み、一気に倒産の危機に陥りました。当社にとって最大の試練。絶体絶命の状態だった当社が何とか息を吹き返すことができたのは、ひと言でいえば、人の縁に支えられた結果です。

当社の危機を聞きつけた東京エレクトロン九州の当時の資材部長の計らいで、この状況を危惧された社長自ら、わざわざ当社まで足を運び、励ましの言葉をかけてくださいました。その上、新たな仕事を回してくださったのです。なす術が見つからず半ばあきらめかけていた私に「あなたなら、まだできるよ」と、元気づけてくれた言葉は忘れることができません。

また、経営者の集まりで知り合った地元企業の社長は、金融機関に助言する形で資金繰りを助けてくださいました。ご縁のある人たちが力を合わせて支えてくれたからこそ、「このままで終われない」という気持ちになり、事業を立て直すことができました。



11 9



7



10



8

1.対談風景／2.3.本社工場内を見学／4.加工部品を片手に説明を聞く五島頭取／5.様々な加工部品の説明を聞きながら談笑／6.工場の生産管理室／7.仕上げ工程の作業風景を見学／8.多くの大型マシニングセンタが稼働している／9.熊本工場／10.大牟田工場／11.企業メッセージ



最前列左4番目から大曲孝彦副社長、大曲和彦社長、五島頭取、安恒支店長(福岡銀行)

## 人を育て人の力を引き出す

試練という意味では、2016年の熊本地震の時も思い出されます。あの震災で熊本工場が甚大な被害を受けました。私もすぐに現場に向かい、あまりの惨状に言葉を失いました。想像を超える苛酷な状況を突きつけられた局面で、人は「笑うしかない」と口にしますが、身をもってそんな気持ちを経験した出来事でした。

しかし、工場に設置していた装置のメーカーからも応援部隊が駆けつけてくれたおかげで、熊本工場の従業員たちが一丸となって復旧に当たり、2週間で生産能力が8割程度まで戻り、ひと月後には完全復旧を果たせました。この時ほど「人の力のすごさを実感したことはありません。

当社は、「従業員の物心両面の幸福」を経営理念のひとつに掲げており、「人を大切にする会社経営」を通じて、多くの人に感謝される会社を目指しています。そして、「人を育てる」目的で従業員教育に注力しています。全社を挙げて挨拶の徹底に取り組み、先輩後輩の関係なく円滑なコミュニケーションを図る風土の醸成に尽力するとともに、技術向上のための勉強会はもとより、幹部研修、リーダー研修などで各自のマネジメント能力を高め、人間力を養う教育にも力を入れております。

また、地域の子どもの夢や力を育む取り組みも、地域に根ざす企業の使命と考え、自分たちができることに力を尽くすよう心がけています。具体的には、工場見学を通じて、ものづくりのおもしろさを知ってもらう取り組みもそのひとつ。ものをつくる魅力を体感した子どもたちのなかから、当社の将来を担う人材が出てきてくれたら、この上なく喜ばしいことです。

それから、毎年1月には「交通安全コンクール」を開催しています。これは地域の子どもたちが創作した絵や標語を集めて表彰するイベントで、それぞれの成長を促す取り組みとして続けています。

私は「知足許為」という自作の言葉を座右の銘としていますが、「足るを知って欲張らず、自分と他人を許し、人のため、社会のために行動する」という意味を込めています。

## 100億円企業へ、 そして100年企業へ

お客さまからのあらゆるご要望に応えるために取り組んできた、機械加工と板金加工を中心とした「設備の充実」。情報、技術、想像力、感性を結びつけた製品づくりによってもたらされる「徹底した品質の追求」。社員各自の能力と

努力を結集させた新たな技術の提案が示す「提案力の高さ」。これらが当社の強みとなつて、半導体製造装置分野のほかに医療用機器や食品用機器の部品も手がけていますが、今後の当社の成長を見据えた時、現在の仕組みや設備では半導体業界の進化や社会の変化に追いつかなくなっていく状況が予想されます。

たとえば、既存の設計データを応用して新たな設計データを生み出すような生成AIを活用したシステムなど、設備の増強やDXの推進に注力しているところです。そして、この取り組みは、今後ますます深刻になっていくであろう「働き手不足」の問題にも対応する力になるものと考えています。

これまでも設備の拡充では、福岡銀行を始めとする金融機関のビジネスパートナーに幾度となく支えていただきましたが、今後も資金面、情報面の双方においてお力添えをいただければと考えております。

当社は、一昨年の2022年に創業75周年を迎えました。当面の目標としては、5年後をめどに売上高100億円企業となるよう邁進していきます。さらに、アジア方面からの引き合いも来ている現状をもとに10年後には、海外のお客さまにも喜ばれるようなグローバル展開を目指します。

## インタビューを終えて

福岡銀行 取締役頭取 五島 久



今や業界屈指の金属・樹脂加工企業としてその地位を確立された当社も、そのスタートは、創業者であるお父上から引き継いだ小さな町の鉄工所でした。半導体製造装置分野に将来性を見出した大曲社長は、その後半導体不況に見舞われながらも、不屈の闘志で当社をここまで育て上げられました。

そして当社創業75周年となる2022年、不断の努力が認められ、国内最大手の半導体製造装置メーカーよりビジネスパートナー約1,000社の中から「顕著な貢献があった事業者」として選出され、表彰を受けられました。「新生シリコンアイランド九州」の実現に向けて、今後当社が果たす役割は益々大きくなるものと期待しています。



熊本銀行

西日本屈指の基礎工事実績を誇り  
バイオディーゼル燃料発電で  
被災地支援にも大きく貢献。

株式会社 九建総合開発

代表取締役  
新永隆一氏

取引店／熊本銀行 植木支店

#### ■会社概要

設立:1980年／所在地:熊本市北区／資本金:  
3,000万円／従業員:41名(2023年8月現在)／  
事業内容:杭工事(場所打ち杭施工および既製杭  
施工)、埋設型地下倉庫、アスファルト再生機/  
関連会社:株式会社九建、株式会社九建運送、  
株式会社未来樹、株式会社ナチュラル

会社ホームページは  
こちらからどうぞ!





株式会社

九建

本社前(左から新永社長、坂本頭取)

## 豊富な実績を有する 杭打ち工事のスペシャリスト

1980年創立の当社は、建築土木分野で基礎工事に用いる杭のメーカーから独立した私の父が杭打ち工事を請け負う会社を設立したのが始まりです。当初は「九州機工株式会社」という社名でしたが、1991年に現在の社名に商号を変更しました。

創業以来、熊本県を中心に西日本全域で、杭打ち工事のスペシャリストとして2,000件を超える現場実績を積み重ねてきました。長年にわたり培ってきた豊富な経験から、独自の詳細な施工データと地質データを駆使した質の高い仕事で、西日本有数の基礎工事業者として多くのお客様からの信頼をいただいております。

とくに熊本一帯は、関東のようにローム層が大きく広がっている地域などと異なり、火山のある地形のため地下の状態が複雑で、ほんの5メートルの距離でも地質がまるで変わる特殊事情があります。そのため、当社の有する膨大な地質データと、それぞれの地質に見合った施工技術は、何よりも強みとなります。

また、基礎工事における杭打ちの方法は、大きく分けて二種類あります。杭打ち機を

使って、コンクリート製あるいは鋼管の杭を埋設していく「既製杭」と、現場で掘削した穴の中に鉄筋かごを入れ、そこへコンクリートを流し込んでその場で杭を造る「場所打ち杭」です。既製杭にくらべて、その場でより大きな杭を造れる「場所打ち杭」は、新幹線の高架橋、大きな橋の橋脚、高層建築物などおもに用いられます。

そして、「既製杭」と「場所打ち杭」の両方をおこなえる基礎工事業者は、全国的に見ても多くありません。いずれにも対応できる技術者と重機を自社で抱えるのが大変だからです。土木建築現場のあらゆるニーズに対応できる体制もまた、当社の大きな特長といえます。

## 若手に手厚い待遇と 働きやすい環境で組織を活性化

さまざまなニーズに応じていくために、当社では常に、最新技術と機材の導入をおこなって、技能研修にも力を入れ、若い人材の積極採用と働きやすい環境の整備に取り組んでいます。その結果、人材の高齢化が進む土木建築業界にあって、当社の従業員の平均年齢は、業界平均より若い38歳程度となっています。



5



3 1



6



4 2





新永社長

当社では、若手どうしでチームを組ませて、若い人が現場でどんな経験を積めるようにするとともに、資格手当や能力給などで各自の成長意欲を後押しする制度を充実させています。仕事に必要な資格はすべて会社負担で取得できますし、最新鋭の重機や工法を経験できる機会の豊富さも若手にとっては魅力となっています。

当業界のみならず、あらゆる産業において若手人材が育たないと業界の未来は閉ざされてしまうでしょう。「若い人が来てくれない」と嘆いているだけでは状況は変わりません。「なぜ若い人にとって魅力がないのか」を考え、環境や待遇を一歩ずつでも改善していく必要があるのではないのでしょうか。

## バイオディーゼル燃料に切り替えて地球環境に配慮する取り組みを開始

社業で実績を積み地域に貢献するのは、企業としての使命ですが、さらに企業の社会的責任を追求していくのもまた、大事なことだと考えます。

当社では環境負荷低減のために、現場で使用する重機の90%以上で「高純度バイオディーゼル燃料(以下、BDF)」を使用しています。BDFとは、菜種油、大豆油、コーン油といった植物由来の廃食用油などを原料として作られる燃料。CO<sub>2</sub>排出は実質ゼロカウントとなり、軽油の代替燃料として使用できます。当社で使用しているBDFは、熊本県内の商業施設、学校、企業、一般家庭から出た使用済みの天ぷら油などを精製したもので、いわば「地産地消」のエネルギーです。

基礎工事現場は、一日あたり300〜400リットルもの燃料を必要とすることから、私たちが果たすべき責任としてBDFを取り入れ始めたわけですが、2024年2月の当社におけるBDF使用量を調べたところ、7,498リットルでした。CO<sub>2</sub>削減量に換算すると約4.6トンになります。

地域と社会、そして未来にも貢献できるエネルギー



10 8



7



9

- 1.対談風景
- 2.BDF製造工場を見学
- 3.BDF製造過程の説明
- 4.不純物を99.9%取り除くBDFの製造機械
- 5.燃料は純度によってタンクで保管される
- 6.使用済み天ぷら油を持ち込めば500mlにつき5分間EVの充電ができる
- 7.2024年6月に納車されたクローラークレーンの前で記念撮影
- 8.埋設型地下倉庫を見学
- 9.災害対策や様々な用途で使用できる埋設型地下倉庫
- 10.企業メッセージ



前列左3番目から村上市長(株式会社未来樹)、新永社長、坂本頭取、田中支店長(熊本銀行)

ギーを積極的に取り入れることで、望ましい環境づくりに継続的に貢献していけたらと思います。

### 地域防災力強化に向けた 連携協定を熊本銀行と締結

更に、環境への取り組みに関しては、当社のグループ企業である「株式会社未来樹<sup>みらいじゅ</sup>」が中心となつて、BDFを燃料とする「移動式急速EV充電機(以下、BMEベネフィット)」を自社開発しました。BMEベネフィットは100%BDFで発電し、電気自動車への充電がおこなえる装置です。電気自動車は走行時にCO<sub>2</sub>を排出しないため、システムとして発電から走行まで環境にやさしいサイクルを実現できます。

また、災害発生時にはトラックに載せて被災地に運搬し、電気自動車への充電のほか、通信機器や家電の非常用電源として活用できます。2016年の熊本地震では、BDFを燃料として無償提供する形で被災地支援をさせていただきましたが、この地震をきっかけとして、熊本銀行と「BMEベネフィットを活用した災害時連携に関する協定」を結びました。この協定により、災害が発生した場合、熊本銀行の本支店駐車場にBMEベネフィットを無償で貸与・設置

することになっています。BMEベネフィットを近隣住民が非常用電源として使用できるほか、住民や事業者が所有する電気自動車を充電し、所有者が自宅等で電気自動車を使用できる体制が整います。

そして、平常時には防災訓練日を設けて定期訓練をおこなうことも協定に盛り込まれています。災害時のBMEベネフィット活用と環境・防災意識の向上も、地域が一体となって目指せたいと考えています。

被災地支援においては、本年1月の能登半島地震の際も、BMEベネフィットを熊本から搬送して、被災状況が深刻であった石川県珠洲市に設置しました。電気自動車があれば、「動く蓄電池」として電気が通っていない避難場所にも電気を供給できますから、BMEベネフィットの特性を活かして、燃料を定期的に補給しながら、5月中旬まで約4か月間被災地で支援活動をおこないました。

## 豊富な実績と技術を活かした 新事業で海外展開にも注力

新製品の開発では、40年以上の社業で培ってきた杭打ち・基礎工事の技術を直接活かした

ものもあります。杭打ちの技術を応用し、大口径の鋼管を近く深くまで埋設し、その内部を倉庫として活用する「埋設型地下倉庫」です。

直径2.5メートルの円形の鋼管を、深さ30メートルまで埋設が可能、地上の倉庫に比べて耐用年数が長く、工期も半分以下と短くコスト面も比較的安価に建設可能であるのが特長となっています。また、大地震が起きた場合、地表の揺れにくらべて地下は三分の一程度で、地下は地震の影響を受けにくいといわれているため、災害時に備えた非常食や医療品の備蓄、重要書類などの保管に適しています。地下倉庫は、温度が通年、一定に保たれるので、ワインセラーなどとしての活用も可能です。

そして、もうひとつが、土木工事全般を手がけるグループ企業の株式会社九建の実績などをもとに開発した「アスファルト再生機」です。当社の開発に注目した防衛省と共同で実験を繰り返し実用化に至ったもので、航空自衛隊の基地などで導入が始まっており、道路補修需要が高まっている海外からも注目され、手始めにタイへの進出を図っているところです。今後も自社ネットワークを活かして海外事業展開にも力を注ぎ、社会に広く貢献できる会社を目指してまいります。

## ■ インタビューを終えて

熊本銀行 取締役頭取 坂本 俊宏

土木建設事業になくてはならない杭打ち基礎工事において西日本有数の実績を誇る企業でありながら、築き上げたものに甘んじることなく、自社技術をもとに次々と新事業開発に打ち込んで活動領域を拡げていく姿勢は、異業種の私たちから見ても大いに学ぶべきものがあります。

当社が環境負荷低減のために精製するBDFは、脱炭素社会の実現やエネルギーの地産地消に大きく貢献されています。そのBDFを燃料とするBMEベネフィットを活用した災害時支援により、九建グループの活躍の場はますます広がり続けると確信しております。





**JS** 十八親和銀行

長崎から全国へ。

高品質な輸配送サービスを提供。

幸運<sup>こううん</sup>ホールディングス  
株式会社

代表取締役社長

馬場<sup>ばば</sup>邦彦<sup>くにひこ</sup>氏

代表取締役副社長

藤野<sup>ふじの</sup>芳弘<sup>よしひろ</sup>氏

取引店／十八親和銀行 竹松支店

#### ■会社概要

創業:1953年／設立:2015年(持株会社体制移行)／所在地:長崎県大村市／資本金:800万円  
／従業員:846名(グループ合計)／事業内容:  
一般貨物自動車運送事業、第二種貨物利用運送  
事業、自動車運送取扱事業、自動車回送事業、  
自動車分解整備事業、倉庫業、コンビニ店舗輸送  
事業、畜産農業／グループ会社:幸運トラック株式  
会社、アヤカエクスプレス株式会社、有限会社長一運送、有限会社  
長崎諏訪運輸、有限会社宝盛運輸、アヤカ自動車株式会社、幸運  
ファーム株式会社、島鉄観光株式会社(航空貨物)

会社ホームページは  
こちらからどうぞ!



Kouin Holdings Corporation



本社前(左から藤野副社長、馬場社長、山川頭取)

## 地域の要請に応じて 戦後の長崎で運送業を開始

当社のルーツは、1953年に先代の馬場光徳が長崎県大村市で運送会社を興したのがきっかけです。当時の長崎にはまだ炭坑があった、それに関連した資材運搬をおこなっていたようです。農産物、牛乳、鮮魚なども地域の要請に応じて運んでいたと聞いています。「人と人」「物と物」「地域と地域」の交流をもたらす事業こそ、お客さまに飲ばれるサービスであり、それが「地域社会の発展にもつながっていく」という、当社の活動を貫く強い思いは、創業当時に育まれたものだといえます。

社名の「幸運トラック」ですが、これは、「ラックキータクシー」という長崎の大手タクシー会社があつて、その創業者が先代と親族という関係性もあり業績も好調であつたことから、その日本語版として「幸運」をいただき名づけられたものです。

私が結婚を機に当社に入社したのは28歳の時でした。それまで佐世保の総合商社で幅広い商品やサービスを取り扱い、営業として多岐にわたる役割を担っていたのですが、運送業界での経験はなく、この業務に就くべきか悩んだ時期もありました。「うまくやっていけるだろうか」

と躊躇していた頃、「苦は道を開き、楽は道を閉ざす」という言葉に出会い、新たな世界へ飛び込む決心ができました。この言葉は今でも、私の座右の銘のひとつとなっています。

## ドライバーの負担軽減を目指し 2024年問題にいち早く対応

入社後は、有名な大手宅配の運送会社や、大手メーカーに直接営業をかけ、取引先を開拓していきました。そして、1990年には長距離輸送を本格的に開始。ドライバーと車両を増やして事業拡大をしました。その後、長崎から全国へと拠点を拡げていきました。

全国を結ぶネットワーク網は、当社の大きな強みです。日本各地の拠点を介して全国の荷物を九州および長崎へ運び、長崎からも全国へと運ぶことができます。

そして、全国を結ぶ長距離輸送事業は、ドライバーの時間外労働時間が制限される、いわゆる「2024年問題」にも深く絡む対象となります。つまり、ドライバーの負担軽減は、長距離輸送ビジネスでは最重要課題といえます。そこで、当社では、「2024年問題」が注目される何年も前から、新たなビジネスモデルの構築に取り組んできました。



5



3 1



6



4 2





藤野副社長



馬場社長

ドライバーの負担を軽減するため、当社が導入を進めたのが荷台を分離できるトレーラーです。輸送の途中で荷台ごと交換するスウィッチ輸送をおこなうことで、長時間労働を回避できます。たとえば、関東から九州に向かうドライバーと九州から関東に向かうドライバーが、中間地点となる兵庫県加西市の営業所で荷台を交換すれば、両者ともそこから出発地へ引き返せるわけです。

これは、全国各地に拠点を有する当社だから可能な仕組みですが、同業者との連携もおこなって、この取り組みを拡大していくつもりです。また、物流各社が環境問題対策として求められる「モーダルシフト」に関しても、当社は積極的に取り組んでおり、長距離輸送に際して船舶を利用することで、CO<sub>2</sub>排出削減、交通事故防止、渋滞緩和への貢献に努めています。

### 高品質輸送と高度な対応力を 実現する独自の取り組み

全国各地に輸送ネットワークを築いて、主要都市だけでなく地方都市の物流も担う当社では、生産者から消費者に届けるまでの当社独自のサービスで他社にない高度な運行管理体制を構築し、お客さまのニーズに合わせて効率的な輸送をおこなっており、そのための独自の施策を講じています。

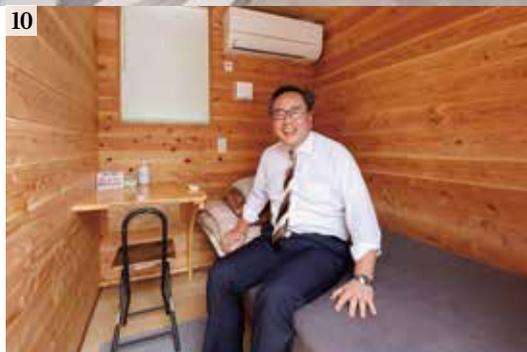
まずは、運行するすべての車両へのドライブレコーダーの搭載。事故・トラブルの発生時、正確な情報を動画で入手して、ドライバーと会社を守ると同時に、安全教育に役立てることが可能です。さらに、高品質輸送実現のために、クラウド型GPS位置管理システムを導入。これによって、運行する車両の位置情報をリアルタイムで



11 9



7



10



8

- 1.対談風景
- 2.トレーラーを見学
- 3.4.GPS位置管理システム
- 5.大型車両の運転席
- 6.予防整備を重視した車両点検整備
- 7.自家用給油施設でのダブル
- 8.冷蔵冷凍車内の様子
- 9.トレーラーハウスの見学
- 10.県内の木材を使用したトレーラーハウスの内装
- 11.企業メッセージ



最前列左から藤野副社長、馬場社長、山川頭取、八尋支店長(十八親和銀行)

確認でき、荷主様からのお問い合わせや緊急時に対応できる体制を整えました。他にも、輸配送管理システムなど、各ニーズに応じた装置の導入もおこなっています。

そして、車両点検整備の徹底。幸運トラックに車両整備部を設置するとともに、グループ会社のアヤカ自動車も車検および点検を担当。エンジン、タイヤ、ガラスなど車の部位ごとのエキスパートがおり、エンジンを下ろしての修理など、「故障する前に整備する」をモットーに、長く安全に走らせるメンテナンスをおこなっています。

また、大型車両のドライバー約500名に加えて、管理者や整備技術者にもトレーラーの免許をもつ者が多数いるため、事故、故障、トラブルの折は、ただちに車両入れ替え、応援等の対応をとれる体制となっています。

これによって、事故や故障の際、もっとも近い営業所が対応して予備車を運行させ、素早く荷物を積み替えて、お約束の到着時刻を厳守する行動がとれます。

## エッセンシャルワーカーにできること

コロナ禍を経て、物流を担うドライバーが「エッセンシャルワーカー」として認められる機会が少しずつ増えてきたように感じています。

私たちは「幸運に頼んでよかった」と言われることを誇りとして活動を続けてまいりましたし、私はこれからも社員に「幸運で働けて幸せだ」と思ってもらえる働き甲斐のある会社にしていきたいと考えています。

そういった意味では、出会った方々とのご縁を大切にすることを、私たちのモットーとして掲げ続けていきたい。私たちが、人とのつながり、地域どうしのつながりをもっと強く実感したのは、被災地支援の活動だったかもしれません。2016年の熊本地震では、いち早く食料と水を届けるために車両を被災地へ向けて出発させました。私自身、熊本には親しくさせていたただいている方が多くいますので、少しでも支えになれば、という思いでいたのを覚えています。

また、2011年の東日本大震災の時は、宮崎で大量の水を積み込み、道路状況が混乱するなか、日本海側のルートから仙台へ入って支援物資を届けました。帰路は、移動手段を断たれて故郷へ戻れずにいた若者たちを、うちのドライバーたちが助手席に乗せて運ぶことに。無事に故郷へ帰れた若者たちは、感激して涙を流していました。

どんなにイレギュラーなご依頼であっても、なんとかして運行便を作って、ご要望に誠実にお応えする。そうした日々の活動の積み重ねが生んだ一幕だったのかもしれない。

## 100年企業となるために

昨年、創業70周年を迎え、私が入社してから40年ほど経ちました。そして30年後に「100年企業」となるためには、長崎自体が元気である必要があります。

これまで築いた人的ネットワークを駆使して、異業種交流会を兼ねたチャリティイベントを開催するなど、地域貢献と活性化につながる取り組みは続けていますが、何といても、長崎空港の24時間化が実現してほしいと願っています。観光客だけでなく貨物も運べるようになれば、全国や世界に向けて長崎の産品を発信できるようにになるでしょう。これからも、安全かつ迅速・確実・丁寧な輸送で高品質な物をお届けし、お客さまの可能性へとつなげるお手伝いをおこなってまいります。



70周年記念広告(2023年10月12日長崎新聞掲載)

## ■ インタビューを終えて

十八親和銀行 取締役頭取 山川 信彦



当社は創業から70年、さまざまな地域の物流需要に応じて業容を拡大し、今では700台以上のトラックと、全国にネットワークを有する物流企業グループとして成長を続けています。

ドライバーの負担軽減への継続的な取り組みや、安全を第一に考えた車両の点検整備体制、GPS位置管理システムの導入による高品質なサービスの提供などによって、お客さまから高い支持を得るとともに働きやすい環境づくりに永年取り組み業界で確固たる地位を築いて来られました。

これからも、働き甲斐のある地域・社会に貢献する企業であり続けるとともに、100年企業を目指して発展されていくことを期待しています。